

氏名	朴 瑛実
ヨミガナ	ホク テルミ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第239号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 G. マーラー《リュッケルトの詩による五つの歌曲》ピアノ伴奏版演奏実践へのアプローチ「リアル感」と「親密さ」の追求ー 〈演奏〉 Mahler Gustav Lieder nach Texten von Friedrich Rückert、Ich atmet einen linden Duft Blicke mir nicht in die Lieder、Liebst du um Schönheit、Ich bin der Welt abhanden gekommen Um Mitternacht

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	佐々木 典子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	多田羅 迪夫
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	寺谷 千枝子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	檜山 哲彦
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	大角 欣矢

（論文内容の要旨）

歌手として勉強してゆくなかで、筆者は自分自身の心の中に「リアル感」のある演奏を目指したいという思いがあることに気付いた。ここで筆者の言う「リアル感」とは、歌手自身の感覚だけにとどまらず、聴き手の感覚と想像力に強く作用し、ヴァーチャルであるにもかかわらず現実さながらの体験を可能にするパフォーマンスの性質であると定義する。

また、筆者にはリートデュオの演奏形態に対する特別な思い入れがあり、リートデュオによる演奏をより「親密」なものにしたいと望んでいる。「親密さ」とは、ピアニストとの関係のみならず、テキストと音楽の双方に対して、また演奏者が鑑賞者に対するあり方である。

つまり、筆者は「リアル感」と「親密さ」を両立させたいのである。「リアル感」と「親密」なアンサンブルは一体どのような事を通じて実現するかというのが筆者の問題提起である。

筆者は博士課程在学中、G. マーラーによる《リュッケルトの詩による五つの歌曲 Lieder nach Texten von Friedrich Rückert》ピアノ伴奏版を研究の対象とし、同時にその楽曲を演奏する機会を得た。このバージョンと向き合ったときに助けになったのは、オーケストラ伴奏版演奏の経験であった。《リュッケルト歌曲集》ピアノ伴奏版演奏実践においても、やはり「リアル感」を表現することとアンサンブルの「親密さ」を目指すことが目標になってくるし、そのためのアプローチを発見することも同時に重要になってくる。

本論の目的は、《リュッケルト歌曲集》ピアノ伴奏版を対象とし、その演奏実践において、「リアル感」と「親密さ」を演奏に反映させてゆく為に必要なアプローチを探ることである。

本論文は全四章から成る。第1章では歴史的・地理的背景にふれながらマーラーの声乐作品全体を俯瞰し、また《子供の不思議な角笛》と《リュッケルト歌曲集》を比較しながらその特異性を描き出した。第2章では筆者独自の視点から《リュッケルト歌曲集》のテキストの性質を表現に反映させるうえで、発音・語感への対処とロングトーンへの対処を主な技術的課題点になると指摘し、それらの技術的課題点に向き合うことによって生じる洗練が齎す作用についても言及した。第3章は、本論文におけるコアの部分である。そこで

はピアノ伴奏版とオーケストラ伴奏版両者の演奏時に生じる声楽的問題と演奏上の相違点を明らかにしながら、オーケストラ伴奏版演奏の記憶を手がかりに、主に以下の三点に着目してオーケストラ伴奏版楽譜を分析し、そこで生まれたアイディアと感覚をピアノ伴奏版演奏実践へ生かしたことによって得た効果・成果を述べた。

- i. ピアノ伴奏版で見当たらなかった音／指示／際立った特徴を発見・認識することによって独唱／アンサンブルにその反映がみられる
- ii. 動機が与えられた楽器パート・セクションを見つめることによって独唱／アンサンブルにその反映がみられる
- iii. ある特定の楽器パート（ソロも含む）が独唱／アンサンブルに影響をおよぼす

第4章では、ピアノ伴奏版およびピアノデュオという形態を選んで演奏する意義と演奏曲順考案について考察した。

筆者は本研究をつうじて、《リュッケルト歌曲集》オーケストラ伴奏版演奏の経験をベースにしながら、オーケストラスコアの詳細な読み取りをして得られた情報を、筆者が理想としている「リアル感」に溢れ、より「親密さ」があらわれたリートデュオパフォーマンスの実現に繋がれることができると確信した。また、演奏にあらわれてくる「リアル感」は、テキストと音楽に対しては言うまでも無く、様々な要素に対して「親密」であることをその源泉としていることがわかった。つまり、テキスト、音楽、共演者、鑑賞者、自分自身の感覚などに寄り添う姿勢を持ち、それらと「親密」であれば、おのずと表現に生き生きした立体感が生まれ、「リアル感」ある演奏になるということである。

本研究を通じて得た発見を今後の演奏機会において生かし、演奏の形態を問わずパフォーマンスの「リアル感」を希求するなかで、筆者はテキストと音楽、鑑賞者・共演者、自分自身にたいしてどこまでも「親密」でありたい。そして、音楽会の現場において鑑賞者と演奏者間で感覚の交流が豊かにおこなわれ、また感動をシェアできることをめざして、パフォーマーとして常にオープンな心的態度でいたいと思う。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、「G. マーラー〈リュッケルトの詩による5つの歌曲〉ピアノ伴奏版演奏実践へのアプローチ——「リアル感」と「親密さ」の追求——をテーマに述べられている。

申請者は、G. マーラーをオーケストラ伴奏版で演奏した経験があり、その経験が同じプログラムでピアノ伴奏の演奏に大変役にたった事などから、実践研究としてこのテーマにたどり着いた。申請者は、演奏家だけでなく、聴衆の感覚、想像力を刺激し現実さながらの体験を「リアル感」と定義し、「親密さ」はピアニストとの関係のみならず、テキストと音楽の双方に対して、また演奏者が鑑賞者に対するあり方としている。「リアル感」と「親密さ」を両立させるために何をすべきか問題提起をしている。

発声と発音について考えてあるところと、第3章のオーケストラ版を参照して比較しているところは評価できるが、ピアノ版との違いをパートの楽器一つ一つでなく、曲全体の構成について考え、転調等についても、オーケストラの構成の変化ともう少し結びつけても良かったのでは。第4章が少し浅い。リートデュオとしてピアニストとのコラボレーション過程での双方の意見交換の記録などをもって、演奏に向けてどのように変化して行くか等のアプローチがあっても良かったのではないか。カタカナ表記が少し多く、全体が少し軽く見られてしまうかもしれない。しかし演奏者としての理想を模索して常に演奏とはと考えている姿勢が素晴らしい。学位演奏は、申請者がこだわっているリュッケルトの詩の作品で統一、複数の作曲家の作品でプログラムを立てた。申請者は、すでにリート歌手として活躍している演奏家であり常にレベルの高い演奏を評価されているが、今回は体幹の故障により、前半のプログラムは楽器である身体が少し反応しづらかったようである。

しかし、マーラーの作品はやはり申請者の得意とする作品でもあり、きめの細かい美しい音色と卓越したテクニックで、テキストもフレーズも素晴らしく、高く評価される。演奏、論文ともに、審査の結果、合格とした。